なみのあゆみ

あかね会 府立第四高等女学校 都立南多摩高等学校 同窓会 会報

特集号

昭和56年9月20日 発行

あかね会

八王子市明神町4-20-1

都立南多摩高等学校内

〒192 TEL 0426-42-2431

緑にかこまれた母校

発刊の辞

母校の発展を期待して

本誌は、東京都立南多摩高等学校の同窓会である「あかね会」の会報特集号で、現在南多摩高校に在学される後輩諸君と、これから南多摩高校に進学を希望されるみなさんへの親愛の情と期待をこめたメッセージです。

私たちは、間もなく四分の三世紀になろうとする、南多摩高校の輝かしい歴史に誇りを持つとともに、この学校を自らの母校とする幸せに感謝しております。したがって、母校の発展のためならば、また、後輩諸君の必要のためならば、いつでも会員の力を結集して、できる限りの支援をする所存です。

母校への協力は、同窓会の自然の心情に発するものですが、私たちは、それが、単なる母校愛の発露ということにとどまるものではなく地域社会に貢献する一つの具体的な方途としての意味を持つものと考えています。

南多摩高校が、その歴史と伝統にふさわしい充実した内容を持って、ますます発展することは、地域社会の将来にとっても、きわめて重要なことであると考えるからです。

本号では、各界で活躍している何人かの同窓生のことばを特集しました。意のあるところをお読み取りいただければ幸です。

編集委員会

府立第四高等女学校
校　章

府立第四高等女学校校歌

一、多摩の郷に　我が学び舎は立つ
名にし負える　たまのごとくに
まどかなる　徳をみがきて
世をも家をも　ほがらかに照さん
学びの友　あゝわれら乙女

二、多摩の郷に　我が学び舎は立つ
めぐるいづみ　くめどもつきず
にごりても　また澄みかえる
道の真実を　こころにみつめん
学びの友　あゝわれら乙女

都立南多摩高等学校校歌

作詞　藪田義雄
作曲　信時　潔

一、湧水は　街をめぐり
いつも映す　雲や風を
美わしき八王子　わが産土
朝焼の　彩るごとく
華やぎて　声あわすわれら若人

二、山脈は　街に迫り
いつも招く　雲や霧を
逞しき南多摩　わが国原
踏み越ゆる　ゆくての嶮を
仰ぎみて　眉あがるわれら若人

巻頭のことば
母校南多摩高校の発展を期待して

現在、高校教育は、社会の変化に対応して、新しいあり方を求められています。

日本経済の高度成長と併行して、高校進学率は、過去二〇年間に急激に上昇しました。全国的にみて昭和三〇年に五〇％を超えた高校進学率は、昭和四〇年に七〇％、昭和五〇年に九〇％を超え、現在九四％に達しています。東京都に於ても、ほぼ、これと同じ数字を示しているようです。

急増した高校進学希望者に対応してこの間、都立高校の増設が相次いで行われました。昭和二三年に新制高校が発足した当時、普通科六三校、職業科三五校、合計九八校であった都立高校（全日制）は、現在、普通科一四八校、職業科五三校、計二〇一校になっています。約三〇年間で二倍以上に増えたわけですが、特に三多摩地区では、二三年当時の普通科七校、職業科六校、計一三校という状態から、現在は、普通科五二校（七・四倍）、職業科一一校（一・八倍）、計六三校（四・八倍）と飛躍的に増えています。高校のこのような急激な増設は、恐らく世界的にも類例のないものでしょう。

高校教育の量的拡大を経た現在、大きく浮び上がってきたのが、高校教育の質的な改善・充実の問題です。多様化した高校生のそれぞれの特性に応じて、充実した高校生活を実現させるために、また、予測の困難なこれからの時代を生きる生徒に本当に役立つ力を育てるために、教育内容や教育方法をどのように改善し、どのような目標のもとに高校教育の充実を図らなければならないかという課題です。

折から、都立高校の入学者選抜制度が改正になり、来年度から普通高校は志望が生かされるグループ制になるとともに、都立高校も、それぞれの学校の創意工夫によって、特色ある学校づくりを目指すということです。

私たちは、これを機会に、母校南多摩高校が、地域の期待に応えて、さらに飛躍的に発展することを願っております。南多摩高校は、多摩地区の普通高校では二番目に古い七十余年の歴史をもっています。この歳月に培われた伝統を基礎に、新しい創造が、校庭の大樹のように伸び立つことを期待しています。教育の場であり、人間形成の場である学校にとって、歴史は重要な意味をもった環境の一つといえるでしょう。母校の新しい時代へ向けての創造の秋にあたり、生きている歴史の一端として、この小冊子をお届けします。

年表　南多摩高校

明治

24年　横川楳子女史私立八王子女学校を創設（天神町・本校の前身）
41年　東京府立第四高等女学校開校
44年　3月24日第1回生卒業（48名）

大正

4年　実科第1回生卒業（25名）
〈創立時には本科と技芸科に分かれ、大正初年に実科を併設〉
11年　第1回富士登山（7月に3泊）
12年　創立15周年記念式典挙行
関東大震災（本校は被害軽微）
15年　バスケットボール全国大会で準準決勝に進出

昭和

6年　実科17回（最後）卒業（47名）
11年　創設者横川楳子女史の胸像建立
〈現在も校庭南側の元正門近くの樹陰にある〉
13年　補習科第1回生卒業（29名）
〈補習科は18年の6回生まで〉
16年　籏野富美　水泳・200m自由型で日本新記録樹立。さらに17年に更新
野中喜美子　水泳・100m平泳で日本選手権を獲得
12月　太平洋戦争勃発
18年　都制施行。東京都立第四高等女学校と改称
19年　専攻科第1回生卒業（9名）
〈専攻科は附設課程等を含めて24名が卒業している〉
学徒動員令（工場等に動員）
都立臨時教員養成所を併設
20年　校内に戦時託児所を開設

南多摩高校の現状と課題

―あかね会会報に寄せて―

校長　荒久保　忠夫

長年にわたる念願であった校舎の改築と学校群の問題とが本年度中に決着がつくことになりましたので、五十七年度は本校にとって一つの転換期になると思います。

現在、教育環境の整備は順調に進んでおりますが、これも同窓会・PTA・地元の方々のご協力の賜ものと感謝いたしております。

そのご期待に応えるべく、更に教育内容の充実に向って学校を挙げて取り組んでいきたいと覚悟を新たにしているところであります。

今回同窓会会報が発行されることになりましたので、同窓の方々のご理解を得るために、この機会に、母校の現状と今後の課題について簡単にご報告いたしたいと思います。

都立南多摩高等学校
校　　章

五十五年一月、古い木造校舎の代りに鉄筋四階建の立派な校舎が落成し、本校の鉄筋化は一応の完成をみました。

五十六年八月には多目的に使用できる特別教室が完成し、巾広い教育活動に利用できることになりました。

また五十六年度増改築工事として、体育館・格技室・プール・食堂・校庭整備の予算がつき、現在基本設計中で、本年度中に着工の予定になっております。五十七年度中にはすべて落成する予定で、これができますと本校の環境整備はほとんど完成することになります。

なおこの工事で体育館・プール・校門の位置が変わり、校庭の形も変わりますので、学校の外観は一新されることになるでしょう。

五十七年度には外貌の変化だけでなく、教育課程の改定、入学選抜制度の改正などにより、内状にも大きな変化が起ると思われます。入学選抜制度の改正により、多摩地区では学区割が変わります。本校は第七学区に属し、八王子・日野・町田の三市に在住する生徒を受け入れることになりますので、地域社会、特に八王子市とのかかわりはより密接なものになっていくものと考えられます。

本校では地域社会との連携を学校運営上の重点の一つとして努力してまいりましたが、今後は更に連帯性を強めていかなければならないと思っております。

教育課程の改定・入学選抜制度の改正を踏まえ、各学校では特色ある学校づくりに努めておりますが、本校でも独自の特色を作っていかなければなりません。伝統ある学校という特色のうえに、更に新しい特色を加えていきたいと考えています。

九月・十月に二回にわたり、本校現職教員を講師として、三市の市民を対象に、PTA行事として企画した公開文化講座は父母の生涯学習の一環というだけでなく、対外的には地域社会との連帯性を深め、校内においては教員の研修意欲の向上と、それによって生ずる生徒の学習に親しむ雰囲気作りのために大いに役立つものと期待しております。

以上、本校の現状と将来についてその一斑を説明いたしましたが、将来への向上のため、教職員の共通理解の上に立って、努力を続けていきたいと思っております。

同窓の方々のご理解とご協力を切望してやみません。

21年　8月2日夜、空襲により全焼（焼け跡で校舎再建を始める）
　　8月15日　終戦。（くぎ拾い、トタン集めから校舎を再建）
22年　3月1日天皇、本校に行幸。激励のお言葉を賜る
23年　平屋建て木造校舎完成
　　新制高等学校発足
　　第3回国民体育大会で水泳競技で総合優勝
　　家庭科教育のモデル学校に指定される。
　　ホームルーム・セルフスタディ・五日制・生徒会・選択教科の別格実験校に指定される。
24年　新制第1回生卒業（41名）
25年　男女共学実施（男子7名入学）
　　1月東京都立南多摩高等学校と改称現在の校章を制定
26年　男子2回生150名、女子200名入学
　　定時制高女第1回生卒業（44名）
28年　定時制第1回生卒業（66名）
　　専攻科6名卒業
30年　野球部、青竜旗戦大会に優勝
　　創立45周年記念式典挙行
32年　前東館（木造モルタル）落成
　　前あかね会室（鉄筋）落成
33年　前北館（木造モルタル）落成
　　現体育館兼講堂落成
34年　創立50周年記念式典挙行（あかね会が時計台の時計寄贈）
　　現西館（鉄筋三階建教室）落成
42年　現西館特別教室落成
　　学校群制度実施される。
47年　創立60周年記念行事
　　（あかね会が体育館の緞帳と玄関前の巨石を寄贈）
　　プール改築　（5ページへ）

府立第四高等女学校と私の人生

久米京子（大正13年卒）

〝富士の嶺の気高き姿浅川の清き流れを鑑にて……〟私は多摩地区の生れ、地続きの第四高女に進学した頃のこの歌は、そのまま私の人格形成の中核となって来たようです。日本女子大学校に進んだ後も、帰郷すると真先きに河畔に降りて、清らかな水の流れや、富士山を抱えて果てしなく拡がる青空に、吸い込まれるように抱かれた昔を懐かしく思い出します。

私の人格形成に係るもう一つの思い出は、第四高女の廊下のつき当りに、毎週新らしく掛け換えられた格言です。〝終生百歩を譲るとも一歩を曲げじ〟〝事足れば足るに任せて事足りず、足らで事足る身こそ安けれ〟などは特に感銘深いものでした。当時の第四高女は質実剛健、勤労の習慣を身につけた農家の主婦の養成を目指していた由で、放課後には全校の生徒が校庭に集り、一定時間速歩をして足腰を鍛え、遠足の日には八里の道程を歩き抜いた事もあり、当時の女学校としては珍らしく、富士やアルプス等にも登りました。

校庭の一隅には各学年に割り当てられた畑があって、級長だった私は大いに気負って肥桶担ぎをした経験があります。天秤棒で振分けに担いだ二個の桶を運んで歩くと、黄金の液体が私の足運びとは無関係に揺れ動いて仕末に終えず、泣き出し度くなった事も覚えています。

私の生家は製糸工場を経営して米国に輸出しており、人手には事欠かなかったので、怠惰で脆弱な人間に成長する危険も孕んでいたのですが、七十五才を過ぎた現在でも、年間何ケ月かは北軽井沢の山荘で暮し、声楽や自転車のりなどの趣味を楽しむ事も可能な身体と心を育ててくれたのは、第四高女での五年間のこのような鍛練の賜物と思っています。

私は女学校在学中に人生の最大痛恨事の一つに遭遇しました。それは、一年生の時に母を、四年生の時に父を失った事です。姉は既に他家に嫁し、家族は祖母だけという家庭に残された五人の弟妹達がみんな私に慕い寄るという状況の下では、当然の事として卒業後家に止ることが要求されました。しかし、いじらしい弟妹たちの力になってやりたくても、私の非力ではどうにもならない事が次々と起って、上級の学校に進んで実力をつけなければという思いが次第に強くなりました。ずっと私達を受け持って下さった先生がこの悩みを目ざとくキャッチされ、師走の寒空の中、長い道のりを汽車に揺られて我が家を訪ねられ、祖母を説得して下さった事を今でも有難く思い起します。日本女子大は、当時としては進歩的だった良妻賢母主義に立ち、高等教育を受ける数少い女性であった私達に、一個の人間として社会にこの恩恵を還元すべきであると説きました。家庭婦人が職業に就く事を当然とする現在とは異り、家庭と職業とを両立させる為に必要な施設もなく、便利な家庭用器具も開発されておらず、両立に対する社会的コンセンサスさえ無かった時代の両立はかなりの難事業でしたが、曲りなりにもやり遂げることが出来たのは、第四高女時代に身につけた質実剛健の気風による処が多いと感謝しております。

（五六・八・一三）

筆者紹介

（旧姓　森田）

日本女子大学家政師範科へ進学、直ちに故久米又三（元お茶の水大学学長）と結婚。共にアメリカ合衆国シカゴ大学に留学。一男一女をもうけて後、東京大学心理学科研究生などを経て、昭和37年文学博士（心理学専攻）の称号を受ける。元日本女子大学教授。

明治 大正 昭和 制服の変遷

本校の制服の変遷を示す左の写真は、いずれも同窓生の制作した人形で、学校の応接室に展示されています。

戦後

昭和初期

大正時代

明治時代

自治政治に足を踏入れて

小川　良（昭和3年卒）

筆者紹介

都立南多摩高等学校同窓会あかね会長
立川市老人クラブ連合会会長
立川市シルバー人材センター高令者事業団会長
立川市民憲章審議委員会会長
都民交通株式会社取締役
保寿産業（不動産会社）取締役会長
立川ハウジング株式会社監査役
元　立川食肉株式会社副社長

昭和二十年八月十五日終戦という名のもとに敗戦となり残されたものは、昔の諺の通り「戦い破れて山河あり」、この山河により生き残りの同胞が食べて生きて行く。この先きどうなることか、占領下におかれた者はお先き真暗でした。幸いかな、アメリカ軍に占領されたその内に憲法改正と共に女子にも男子と同様満二十才で同等の権利が与えられ選挙権も与えられ二十三年四月の総選挙から施行されました。私達婦人も新憲法の勉強やら占領軍のミスミス軍政官から婦人団体の在方活動等々引き廻されて民主主義をとかれました。その内立川市農業委員の任命をうけたのを振り出しに立川市議会に足を踏入れて議員生活二期、その間種々の問題点に打ち当りましたが丁度その二期間とも同窓の須田ヱン女史と一緒でしたので何かと一致点も多く共に活動出来たことは幸いでした。

議会の議員はどんな市町村議会でも男女の区別はない義務も責任も同じです。市理事者の提案に対し経緯と施行してからの住民への利害得失等、判断のもとに審議し賛否を行うもので自からの研究と同志との討議の結果議決するのです。特に議員提出による議案上程はその財源をどこに見つけるか等同志と共に夜を徹したこともありました。亦住民の要望を理事者側の提案に組みこませ上程させるべく掛引等誠に微妙なところがありました。丁度三十年代でしたので敗戦で間に合せの衣食住から朝鮮動乱の時期を経て経済的に我が国も立ち直り物資が新しい物が開発される時でしたので市の理事者と議会側も乏しい財源の中に先づ街作りということで上下水道の完備と日本の発展は次代を担う子供の教育しかないということで教育の場である学校校舎の整備に重点を置きました。立川市は他の街と異なり占領軍の飛行機の滑走路の下にある校舎第一小学校の移転問題が起り市当局は調達庁の方針通り移転に踏切り住民やPTA会員を説得しておりましたが反対されて困って居りました。

新議員の私や須田女史と共に小学校の性格上PTAと同調して反対に廻りこの解決方法に苦慮して市理事者を督促しながら調達庁との交渉に入りましたが「駄目」そこで議員間で考えて立川で一番古い校舎であることから老朽校舎として文部省に交渉を変更して陳情を繰返しながら改築予算の獲得に成功し着工した。さすが頑強な調達庁も折れて防音工事の費用を支出せざるを得なくなりました。以後の学校々舎の改新築は調達庁より国庫補助金で完成することとなりました。第一歩の踏出しにあんなに骨折ったことを考えると今更ながら感無量と存じます。振り返って見るとよき時代に議員生活が出来たと有り難いと思うと同時に後に続く婦人議員のないことを淋しく思います。私共の議決により出来上った諸設備の所を通る度にその時の様子が走馬燈の様に目に浮びます。南高を卒業してから既に五十余年を過ぎておりますが、あの頃東京都の代表としてバスケットボールの大会に出場したことは忘れられません。チームのものが共に苦しみ助け合ったことは青春を語り合う最大の宝物であります。サインを出し合ったことがひとの気持をすみやかに読みとることを培ってくれました。在校中にスポーツ活動を通して培われたことが今日の私の貴重な財産となって生きて働いているのです。

47年　女子軟式テニス関東大会に東京代表で出場（稲付恵子・細谷麗子）
　　陸上部、関東大会に東京代表で出場五種競技（小川藤生）、円板投（大池麻也子）
48年　図書館建築（西館4階）
　　生徒部室落成
　　陸上部、春季大会全国大会に出場800m（二見裕子）
　　卓球部、関東大会に東京代表で出場（馬場正洋）
49年　陸上部、全国大会出場（森田直美）
　　女子軟式テニス部、三年連続関東大会に出場
　　サッカー部、関東大会予選で東京都ベスト8位
50年　全国家庭クラブ論文コンクール2位（八木岡明美）アメリカに見学旅行
51年　同前コンクールに入賞（榛原紀子）アメリカに見学旅行
53年　創立70周年記念式典
　　ソフトボール部、新人戦都大会でベスト8位
54年　女子軟式テニス部（相沢・岩瀬組）都高校招待大会で優勝
　　演劇部、第33回都高校演劇コンクールに多摩地区代表で出場、優良賞を受賞
55年　1月、現東館（4階建）校舎落成
　　5月、新校舎落成記念行事（あかね会で、南庭の庭園を整備）
56年　新制33回生卒業（男子163名、女子190名）
　　特別教室増築工事完工

みどりの音

笠間文子（昭和3年卒）

五十余年前の府立第四高女は欝蒼とした木立の中に、現在だったら明治村行のがっしりした木造二階建校舎が、拭きぬかれた窓ガラスをキラキラさせてのぞき、校門前を流れる小川の底の水草にも四季の色があった。市内の糸染工場の染色（そめいろ）が時どきこの川にも流れた。地理の先生は山紫水明と称えたが、ふる里は遠くにありて云々で、ずっと後になってそう思ったのも戦火にかかってしまった。

当時音楽学校を志望した一人だったが、コースの上に乗る過程など無かったから自分で学ぶだけで、頼むは先生、先生を目標にするしかなかった。合天井造りの講堂の隅に（音楽室が他科の教室になってしまった）週一回の放課後、声楽基礎のコンコーネ、音程教本、ピアノと、先生と生徒は一体になった恰好で教えて頂いたものだった。

市内にピアノのあるのは学校だけだったから、オルガンで譜を見ては小学校で弾かせて貰った。大都の近いのが却って地方都市に比べておっとりとした八王子であった。

上野の学校まではたっぷり二時間かかるので寄宿舎に入ったが、この三年間は対人社会学のようなもので、ぽっと出が人生への目の開けた一歩だった。齢七十才の今、昔よきライバルであったものがその意識はとうに消え、今も続く交流の人々の前向きの姿勢にお互が啓発され、逢えば必ず身の内に為さねばならぬ心が湧いてくる。

家の事情で家庭に入ってから四人の子の母となり、何の世界でもその価値観は同じであるとし、長女だけはピアニストになった。

前庭の池
（創立以来のもの）

長女のレッスンを受けていた人がロンドンに発つことになり、何時になくゆっくりして喋っていた。長女の始めて聞く話は彼が南多摩校出身とのことに「お母さん、彼はお母さんの後輩よ」と私を呼びに来た。彼とは重野和彦君で、毎日コンクール一位、芸大も大学院も出て昨秋の国際コンクール四位となった人。つい先日ロンドンから手紙が来たと云うので私は「ロンドンは王子様の結婚で大変でしようね」と云ったら娘は「重野君はピアノの弾ける部屋を探すので大変ですよ」と言った。

又、小一の孫の先生の家庭訪問の日に、白百合のように美しい先生が来られた。短い時間に色々懇談して居られたがその中「お母さん、前場先生は南多摩校出身ですって」と呼ばれてお逢いした。先輩後輩の縁と喜び合ったのは言うまでもない。偶然がより以上嬉しさを深めた。

夢の中に桜吹雪の嘗ての校庭がある。毎日十分間ほどの全校体操である。遅れて出るに出られない恥しさと焦りの私が居る。今も。ひとりで遊べて無から有を生むことに懸命になっている。自分でも何が出てくるか判らないからスリルがある。相手があれば良く多勢ならばなお楽しい。始め闇であった俳句の世界が少し開けて来た。音楽も同じことである。老いて心が燃えているとでも申しましょうか!!。（五六・八・四）

筆者紹介

昭和6年　東京音楽学校師範科卒
昭和15年まで教職（新潟県立新潟高女・日本橋女学館高女）
昭和46年　中村訂女主宰「風花」同人
昭和55年　鷹羽狩行主宰「狩」会友
昭和49年　随筆「蜷の目」ふだん記発行所出版

新教育課程

昭和57年度実施

57年度から実施される教育課程表を学年別に示しました。学力の充実を目指して編成されているのが特色です。

◇一年

標準単位は各科目ごとに文部省の指導要領に示されているものです。三年間合計は、本校の教育課程で三年間に履修する合計単位数です。

一年は芸術の選択を除いて共通必修ですが、一年の時に充分時間をかけて学力の基礎を確立することをねらいとして国語Ⅰ、数学Ⅰ、英語Ⅰが標準単位より1～2単位多くなっています。

教科	科目	標準単位数	3年間合計	一年
国語	国語Ⅰ	4	13～19	5
	国語Ⅱ	4		
	国語表現	2		
	現代文	3		
	古典	4		
社会	現代社会	4	12～16	4
	日本史	4		
	世界史	4		
	地理	4		
	倫理	2		
	政治・経済	2		

使命に就いて

前嶋妙舟（世志子改め）
（昭和5年卒）

近頃の社会状勢を見て居りますと、種々の分野に於て己の職務を忘れ不測の事件を引き起して居る事の多いのに驚きます。例えば電車の運転士が停るべき駅を通過してしまったり、医者が注射を間違えたり枚挙に違ないのですが、こうした事は皆各自の持場に対する使命感の欠如にほかならないのであります。

では使命とは何か、辞書には使命とは言いつけられた命令とありますが、使命の根本の意義は即ち、使命＝生命＝呼吸（生き）であります。各自の肉体は無限とも言うべき大いなるもの（之を天・神・造物主等とも言う）によってこの世に送り出されたものであり、その大いなるものとの連繋はこの呼吸であります。

してみればこの呼吸即ち生きると言う事は瞬時も離れることの出来ぬ使命であります。吾々がいつでもいかなる処でも、そこに立脚する処が生きる場であり、使命遂行の場であるわけで、常に正しい呼吸のあり方を行って居れば使命を錯るという事はないわけであります。

この呼吸を斉のえるという事については古来坐禅、数息観（之等を内観という）等の方法があり、各自が苦習練得するわけですが、つまりはそれによって真実の自己を発見し、更にそこに大使命を見出すわけであります。この出息入息（安那般那の法という）はまことにたわいない様なものですが、いざ斉のえるとなると案外簡単にゆきません。川柳にも、〝坐禅して去年の借りを想い出し〟等とある様に、脊柱を真直にし臍下丹田に気を集め、静かに出で入る息を数えるとなると初めは精神統一のつもりが、かえって妄想去来の中に七転八倒するという事にもなります。が何事も修練で、当らなかった弾もいつか的に当る様に、自然に波心の平静を得る様になるのです。

そうなると常に動中静中、その境地が続きますから間違を生ずると言う事が少ないわけで、随処に主となれば立処皆真と云う先哲の言葉どおり正に今居るここが真であり、天の道であるわけで各自の生命の生き切った状態であります。この状態に於て天の感応せざるはなく、天の力正しき判断の働かぬわけはないのであります。

各自が今日只今かくあるのは決して偶然ではなく、そこには無数の祖先の生命が結集しているのであり、又大いなるもの・意志が常に働いている珠玉の如き尊い生念であります。昨今の如き不確定な時代といわれている時、各自が己を見つめ、己の使命に精進する事こそ急務と言はねばなりません。

折角各自は輝やかしい役割を持ってこの人生劇場に登場したわけですからこの持役を完全に生かし切らねば勿体ない次第です。真に生きた一年は無駄に生きた百年に相当すると云います。徒らに浮雲の如き名利の慾のみを追っていては民族の滅亡は必至です。

春秋に富む諸君諸姉、何卒、今と言ってももう過去になってしまうこの即今只今の一瞬一刹那の呼吸である小さい様で大きな生命、使命をよりよく生き切って下さい。

＊＊＊＊＊

筆者紹介

昭和9年　昭和女子薬学専門学校卒、4月東京大学薬学科介補として在籍
昭和12年　昭和女子薬学専門学校助手
昭和20年12月　東京大学医学部伝染病研究所（現医科研）第三研究部勤務
昭和28年　医学博士の学位を受ける。
昭和38年　依願退職（リュウマチのため）
昭和40年　青森明の星短期大学教授
現在　漢方研究と禅書出版。昭和24年より中島鉄心老師に参禅　現在に至る。

教科単位数計	家庭				外国語					芸術			保健体育			理科						数学					
	保育	食物	被服	家庭一般 女	英語ⅡC	英語ⅡB	英語ⅡA	英語Ⅱ	英語Ⅰ	書道Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	美術Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	音楽Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	保健	体育 女	体育 男	地学	生物	化学	物理	理科Ⅱ	理科Ⅰ	微分・積分	確率・統計	基礎解析	代数・幾何	数学Ⅱ	数学Ⅰ
	2	2	2	4	3	3	3	5	4	2	2	2	2	7	11	4	4	4	4	2	4	3	3	3	3	3	4
86～96	4～6				14～18					4～6			9～13			12～16						12～20					
32				2					6		2		1	2	4						4						6

生徒一人当たりの履修単位数	クラブ活動	ホームルーム
92～102	3	3
34	1	1

国際婦人年と婦人に関する施策の推進

野口敏子（昭和13年卒）

「国際連合」は、「国際婦人年」（一九七五年）につづく一九七六年～一九八五年までの十年間を「平等・発展・平和」を目標とする「国連婦人の十年」と宣言いたしました。

以来、世界各国においてそれぞれ目標達成のために活発な活動が展開されています。

わが国でも昭和五十年九月に婦人問題企画推進本部を設置し、五二年一月には、十年間の我が国の婦人施策の基本的方向を示す「国内行動計画」を策定し、その目標の達成に向って様々な活動が各方面ですすめられており、中でも男女平等を基本とするあらゆる分野への婦人の参加を促す活動が行われてきました。

とくに五五年は「国連婦人の十年」の中間年にあたるので世界各国ともにこれまでの活動の見直しと検討が行われました。我国では「国連婦人の十年「一九八〇年世界会議」（於コペンハーゲン）に参加し、デンマーク日本大使高橋展子女史が「婦人に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」の署名式に参加して署名を行ないました。

その後昭和五六年二月には婦人問題企画推進会議の意見書ならびに広く各方面の意見等を参考として『婦人に関する施策の推進のための「国内行動計画」後期重点目標』を策定しました。

この重点目標は、五二年に策定された「国内行動計画」の目標達成を図るため、後半期に重点を置いて推進する事項をとりまとめたものであり、また、「婦人に関するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」批准のための条件の整備については、後半期における重点課題として推進することとしています。

その重点項目を上げると次の九項であります。

1 婦人の地位向上のための法令等の検討
2 政策決定への婦人の参加の促進
3 教育・訓練の充実
4 雇用における男女の機会の均等と待遇の平等の促進
5 育児等に関する環境の整備
6 母性の尊重と健康づくりの促進
7 老後における生活の安定
8 農山漁村婦人の福祉と地位の向上
9 国際協力の推進

今後この後期重点目標が、家庭・職場・社会において達成されるよう大きな努力がはらわれますが、国・地方公共団体等の公的な機関と、民間諸団体が連携を深め、国民全体がそれぞれの分野において活発な活動を展開することが期待されています。

マラソン大会

筆者紹介

昭和17年　奈良女子高等師範学校卒、外務省より上海第二日本高等女学校に派遣される。
昭和21年　労働省婦人少年局勤務。千葉・福岡・北海道・大阪各婦人少年室長を歴任。その間西欧各国に派遣され、婦人問題を研究。
昭和51年　婦人雇用研究室長（雇用促進事業団）
昭和54年　労働省東京婦人少年室長（56年退官）

◇二年

二年では、芸術のほかに、社会と理科が選択になります。選択A・Bのいずれかを選ぶことになりますが、Aは社会が、Bは理科が標準単位より多くなっています。そのほかは共通必修で、国語IIはI単位増となっています。

将来に向かって、学力を大きく伸ばすためには、一年・二年の学習で基礎を固めることが重要です。本校では、そのために時間を重点的に配分し、授業の中で、学習法を身につけさせる指導を行っています。学習は、窮極的には自分自身で進めなければならないものですので、それができる基礎を二年までに確立することがねらいです。

教科		国語					社会				
科目		国語I	国語II	国語表現	現代文	古典	現代社会	日本史	世界史	地理	倫理	政治・経済
2年	共通		5									
	選択A							5				
	選択B							4				

愛情ある きびしさへの信頼

清水敬子（昭和14年卒）

筆者紹介

八王子市立長房小学校長
八王子市公立小学校校長会副会長
文部省教員等海外（長期）派遣参加
昭和55年度東京都学校給食功労者賞受賞

私がこの学校に入学したのは、昭和九年四月でした。その頃私の周囲では我が子を、男の子なら府立二中、女の子なら第四高女へ入学させたいと願っていたようです。

八王子に生育し、第四小学校に在学していた私は、六年生になった時両親から「第四高女に入学できなかったら奉公に出す」といわれ本気で勉強するようになったそうです。何しろこの学校へは、八王子はもとより中央線、京王線、青梅線、八高線沿線からの受験者も多く、その人達の中から選ばれるということは大変なことだと言われていました。

私の場合などは周囲の人達も気をもんで、家にいたお手伝いのおばさんは、八幡様にお百度参りをして合格を祈ってくれたということです。

その頃の人達は、「勉強しなさい」と言わないでも、そんな雰囲気づくりをして勉強する気にさせてくれたのかも知れません。

こうして合格できた入学式の日、周囲の人達が皆自分より優秀に思われ不安だったことや、講堂に掲げられた額の「捨我精進」の四文字が、これからの学校生活のあり方を示唆しているように感じたことが、つい昨日のように思い出されます。

それから五年間、時には伝統ある学校に学ぶ窮屈さから級友達と反発を試みたこともありましたが、いつも「蟷螂の斧」に終わり、その後は進学に備えての努力をしました。

昭和十四年四月東京府女子師範学校に入学しましたが、この学校での二年間は女学校時代きびしく指導されていたお陰で、ゆとりある学校生活を送ることが出来たと思います。

今、私の学校では、新教育課程の基本理念である「人間尊重の精神」を基底に、人間性豊かな人格形成をめざし、一人一人の児童が自ら学び、よく考え生き生きと活動できるゆとりと充実のある学校生活の実現に全校を挙げて努力しています。それには先ず、基礎、基本的事項をしっかり身につけさせることが大切であると考えています。

児童一人一人が、学習のきびしさ、楽しさ必要性とともに、学習を成り立たせる基礎的な知識、技術を体得し、生涯にわたって自己啓発や、生活の向上をめざすまで高めていく責任を痛感する時、きびしく指導して下さったY先生のことが思い出されます。

児童一人一人の学習意欲や、学習効果は、先生達の愛情や熱意とともに、時には妥協を許さぬきびしさによっても生まれるものです。きびしさと共に、ひたむきさを持った当時の先生方は、私達の将来に責任を持って指導して下さっていたのです。

このようにして結ばれた師弟のきずなは堅く、級会は卒業以来欠かすことなく続けられ、昨年は米寿を迎えられた先生を祝って、還歴近い級友二十余名が集まり、感謝の会を持つことが出来ました。

現在、私の学校のめざす「人間尊重の精神」の教育もこれと同じであると確信し、日々誠実に児童と共に過ごしたいと思う次第です。

＊　＊　＊　＊

教科単位数計	家庭				外国語					芸術			保健体育			理科						数学					
	家庭一般	被服	食物	保育	英語Ⅰ	英語Ⅱ	英語Ⅱ A	英語Ⅱ B	英語Ⅱ C	音楽Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	美術Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	書道Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	体育 男	体育 女	保健	理科Ⅰ	理科Ⅱ	物理	化学	生物	地学	数学Ⅰ	数学Ⅱ	代数・幾何	基礎解析	確率・統計	微分・積分
	女																										
32	2					5					2		4	2	1									3	3		
																			4								
																			5								

クラブ活動：1　ホームルーム：1　生徒一人当たりの履修単位数：34

私と水泳

村上冨美（昭和19年卒）

私が第四高女に学んだのは、昭和十五年から十九年で、日支事変から太平洋戦争へと、国を挙げての動乱期にありました。スポーツ界も、昭和十五年に開かれる東京オリンピックが、その二年前には返上が決定されておりました。（ヘルシンキに変更したが中止となる）当時、学校の水泳部は、ベルリンオリンピックの候補選手として選ばれた、原・福島両先輩をも出した伝統ある部であり、私は誇りを持って入部し練習をしたものです。

私が始めて日本選手権に出場した時のことです。その頃の私は、身長が一米四十糎たらずの小柄でしたので、スタート台に立った時、観衆は皆小学生かと間違えたようでした。二百米、四百米の自由型に出場して、四位、五位に入賞はしたものの、到底勝てる筈のない相手なのに、負けた悔しさで涙したことを、今でも覚えています。そこで、体力の差は、練習・努力によってカバーしなければと思い、シーズンになると一日も欠かさず、或る時は、朝礼前にも練習、練習の毎日を繰り返しました。

当時のノートに〝ある雨の日〟として「雨が降っている。晩秋のような風が流れる。五月からの水泳練習に鍛えられた私であったが、やはり冷んやりと寒さを感じる。私達は今日も練習である。練習こそ私のこの夏の鍛錬であり、制覇をめざす楽しい日課なのだ。雨だと言って休む事はないのである。私達のために、雨の中も厭わず指導して下さる先生のお姿を見るにつけ、弛みがちな気持ちに恥じるのである」と書かれてあります。先生は、今は亡きコーチの大野先生で、何時の日でも真先きにプールに立たれて、私達が当然すべき掃除や、ロープ張りなど、選手と共に当り前のようになさいました。又、数学がご担任のお立場からでしょうか、選手一人一人の記録をこまかくデーターにして、指導して下さったものです。そうしたお姿が、私達の先生へのより強い信頼となって、毎日の厳しい練習に打ち込むことが出来たのだと思っております。

大野先生のお言葉に〝よく泳ぎ、次に勝ち、そして人と成る〟とありましたが、勝利を得るには、努力すること即ちよく泳ぐことで、これは水泳ばかりではなく、何事にも通じることでしょう。こうして、良き指導者に恵まれて、全国制覇が成し遂げられたものと思っております。私が五年間の水泳練習を通して得たものは、〝スポーツ競技の意義は、弛まざる努力と体力の養成にある〟〝記録は苦しくして作られるものであり、毎日の練習がいかに大切なことか。それには自分に打ち克つことである〟と。何事も、苦しさに耐えて行けば、人は必ずそれを認めてくれるし、成果は喜びとなって顕われるものです。

現在私は、近くにあるスイミングクラブに通っていますが、年令を忘れて、若い方達と同じ距離を泳いでしまい、翌日になって、聊かの疲労を覚えたりしています。これからも健康の続く限り、否、健康を保つためにも泳ぎつづけて行くつもりでおります。

＊　＊　＊　＊

筆者紹介

（旧姓　旗野）

在学中水泳で日本記録を樹立した。

15年8月　日本選手権大会200m自由形　2分44秒8
16年8月　東京選手権大会200m自由形　2分44秒6
17年6月　東京・横浜・八王子三市対抗大会200m自由形2分38秒6・400m自由形5分39秒2
17年7月　日本選手権大会200m自由形2分42秒4・400m自由形5分42秒
17年8月　女子中等選手権大会200m自由形2分41秒
明治神宮国民体育大会200m自由形2分40秒4

◇三年

三年では、進路に応じての選択の幅が広がります。まず、選択A・Bのいずれかを選ぶことになりますが、Aは古典、Bは微分・積分が含まれています。また、Aは社会、Bは理科がI単位増になっています。選択Cは全教科にわたって2～4単位の講座があり、生徒は自分の進路に応じて10単位まで自由に選択できるようになっています。

この講座は、特性を伸ばし、実力の錬成をはかることをねらいとするものです。全体として、本校の教育課程は将来、学習を自らの力で継続していく基礎をつくるとともに、大学進学にもきわめて有効な課程となっています。

教科		国語					社会					
科目		国語I	国語II	国語表現	現代文	古典	現代社会	日本史	世界史	地理	倫理	政治・経済
3年	共通				3							
	A					4		5				
	B							4				
	C				2				2			

私の根っこ

旗野恵美
（昭和26年卒）

「そこの頭のちぢれっ毛の人、前に出て来てみんなの前で踊ってみなさいっ!!」

後の方で自信なげに踊っていた私はびっくりした。体操の時間（林茂子先生ダンス）のある時の事。叱られたと思った。

身体が弱かったのと、体操の種目は、何もかも劣等生だったので、体操の時間でほめられてびっくりぎょう天。以来、私の人生は変化してしまった。人違いのように踊り狂う日々となってしまった。これが私の根っこの一つで、もう一つの高校時代の私の感動は、荒廃した焼跡のバラック建て校舎にピアノが鳴りひびいてた。朝、六時から夜まで。故、稲田先生率いる音楽部。

とにかく、楽典から音楽を学ぶのにはおくれすぎていた私達。あの頃の音楽知識が皆無といっていい学生に心から奏でるピアノの奏法をもちこんで情熱的な教育をはじめ〝猫ふんじゃった〟きり弾けない学生に、わずか一年の間にオペラ〝ショパン〟を演じさせてしまった。

私は幼ない頃、琴を弾いていたが、オタマジャクシには全く無知だったけれど、当時、ピアノの音色が何んとも新鮮で自由に思え、稲田先生の教えを受ける事になった。バイエルそこそこの私の指は、耳から音楽を知り心を知る事によって、ショパンのスケルツオ

横川楳子女史胸像

を高校卒業までに弾く事が出来た。

―先生に弾かせられてしまったのだ―

専門家としての方法をきちんと勉強する事とは別に、まづその原点の〝心〟と〝生き方〟の指針を得た私は卒業後、専門大学、専門スタジオに進み、ピアノを弾きつづけ、踊りつづけてしまった。

三十二年、大学卒業と同時にデビュー、以来、毎年の定期公演を重ね、やっと私の生涯のテーマ、「石」と「鶴」にめぐり逢っている。そして三年前から機会に恵まれ、ニューヨークでも毎年リサイタル。

私は念願の日本の感性を異国で踊る事の喜びと使命感とで、つきる事のない、とめどもなく押し寄せる課題に挑みながら人生中盤戦に入った。

私のテーマ「石」は私の幼時からのメモリアルであるかもしれない。

石っころのように転がされ、途方にくれている私、（石）に、さわやかな教育を受けさせてくれた母校と、小山に囲まれ、清水の都と言われた風景、箱庭のような日本の情緒のすべてを縮図のようにもっていた八王子市とが私を自覚させた。

美しい市は、戦火と共に変化したけれど、私の心の底には文化の源流として八王子市があり、普遍にそれらを教育する母校の校風が――　私の根っことなっている。

筆者紹介

舞踊家
日本大学芸術学部演劇学科卒業
日本大学芸術学部大学院卒業
邦正美舞踊研究所出身
現在　日本大学芸術学部助教授
旗野舞踊研究所主宰

生徒一人当たりの履修単位数	クラブ活動	ホームルーム	教科単位数計	家庭 保育	家庭 食物	家庭 被服	家庭 家庭一般 女	外国語 英語ⅡC	外国語 英語ⅡB	外国語 英語ⅡA	外国語 英語Ⅱ	外国語 英語Ⅰ	芸術 書道Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	芸術 美術Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	芸術 音楽Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	保健体育 保健	保健体育 体育 女	保健体育 体育 男	理科 地学	理科 生物	理科 化学	理科 物理	理科 理科Ⅱ	理科 理科Ⅰ	数学 微分・積分	数学 確率・統計	数学 基礎解析	数学 代数・幾何	数学 数学Ⅱ	数学 数学Ⅰ
24			22						3								3	3												
∫	1	1	∫																		4									
																					5				4					
34			32		2				2.4					2			2				2				2	2.4	2	2		2

思いだすままに

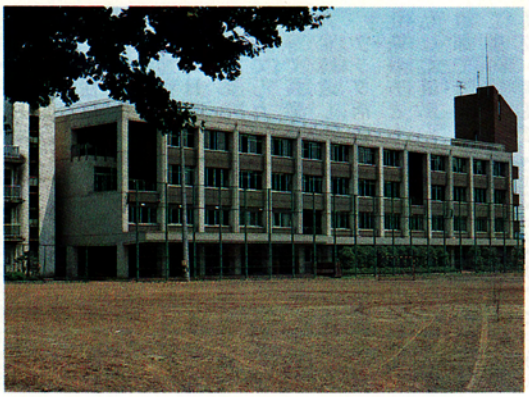
上田千秋
（昭和28年卒）

「一晩で咲かせてみむと梅の鉢を火に焙りしが咲かざりしかな」という歌があります。石川啄木の作品で、青春の焦燥感がよく表れた傑作です。高校生の頃をふりかえるとき、私は時折この歌を思い出します。

私は父の仕事の関係で、昭和二六年の春、疎開先の長野県須坂市から、高尾山にほど近い当時の南多摩郡浅川町に転居し、南多摩高校の二年に編入しました。といっても、新学期前の転入試験に間に合わなかったこともあって、四月から夜間の定時制に席をおき、六月頃でしたか、試験を受けて昼間の全日制に移りました。

全日制に変ってすぐに数学の中間試験があり、見事に〇点をとりました。当然のことながら〇点だった、と言うべきでしょうか。定時制と全日制とでは授業の進み方に差があったのと、自分自身ろくに勉強もしていなかったので、考えてもさっぱり分らず、答案は白紙で出しました。確か微積分の問題だったと思います。数学を受け持っていたのは、船橋さんという女の先生で、生徒に答案を返すときには、成績順に名前を呼ぶという、なかなか厳しい方でした。言うまでもなく、そのとき最後に呼ばれたのが私です。

それから人並みに勉強もし、自慢話をするわけではありませんが、次の試験が八五点、その次が一〇〇点でした。



そんなことを三〇年経った今もはっきりと覚えているのは、〇点をとって口惜しかったのと、その後いくらか成績が上ったことを、内心では誇りに思っていたからかもしれません。今から思えば他愛ないことですが、強く印象に残っています。

そうこうするうちに、三年生の秋になって、健康診断のレントゲンの結果が思わしくなく、結核の一歩手前ということで、体操の実技は免除、運動会はテントのなかで見学、ということになりました。

そんなわけで、転入そうそうのショックや身体の不調は、焦燥感をつのらせるばかりで、何も夭折した天才にあやかるつもりはありませんが、ふりかえってみれば、当時は梅の鉢を火に焙りたい気持でいっぱいだったようです。ですから私の場合、充実した高校生活とはとても言いがたく、自己を語りつつ母校の栄誉と伝統を語るには、極めて不適切なことを残念に思います。でも質は劣っていても、量ならいくらか自慢もできます。

実は、私の母も南多摩高校の前身である府立第四高女の卒業生です。また弟は後輩です。母・兄・弟と一家三人が同窓というのも、珍しいのかもしれません。

私が学んだ頃は木造平屋の校舎でしたが、最近の学校紹介のパンフレットを拝見すると、校舎もなかなか立派なようで、教育環境もことのほかいいようです。南多摩高校がよき後輩に恵まれるよう期待し、私もまたよき先輩であるよう努力したいと思います。

〔写真説明〕

上　この新校舎（東館）は、昭和55年1月落成し、最新の設備をもっている。四階建の延面積四九三三㎡

右　校庭は、本年度着工の体育館改築終了後、全面的に整備される。

筆者紹介

東京大学文学部仏文科を卒業後、NHKに入り、教養番組のプロデューサーを経て、現在大阪放送局編成部次長。
著書に「食生活と文明」、共訳にアルビン・トフラー著「第三の波」がある。
「食生活と文明」の一章は、中学三年国語教科書（教育出版）に転載されている。

南高時代を思う

八王子市議会議員

黒　須　隆　一

（昭和35年卒）

『光陰矢の如し』、ふり返って見ますと、もう二十年以上も昔のことになるんですね。私にとって南高時代は、大変思い出多き時代でした。

すぐ裏の八王子五中から行きましたから、近すぎて、あらたまった感激はなかった様な気がします。

当時はまだ木造の校舎が残っていて、もうひどい時代なものですから、廊下はつぎはぎだらけ、雨が降ればひどく漏るという状態でした。

現在は男子生徒と女子生徒がほぼ同数のようですが、私達のころは一学年男子百名に対し、女子三百名でしたので、男子生徒は若干肩身の狭い思いをしました。また、女性の数が多いことと、女性にもてることとは必ずしも比例しないことを知ったのも南高時代です。

当時は南高も質実剛健的なところが残っており、男子は二年生迄は全員坊主頭でした。三年生になると就職の関係等で長髪を許されましたが、それが大変待遠しかった記憶があります。

クラブ活動もさかんで、体育系、文化系双方ともに活躍しておりました。私は柔道部と写真部に所属し、特に柔道部では、三年生の時に市内の八王子工業高校・富士森高校・二商・八王子高校・南高で『五校対校戦』という大会を組織し、その第一回大会に優勝したことが懐しく想い出されます。

卒業後私は武蔵大学に進み工業経営学を修め、家業の建設業に就いたわけです。現在は、当時考えても見なかった政治の道に入り、昭和五十年以来八王子の市議会議員として市行政推進の為に微力を傾けておりますが、同期の議員に、私と全く同じく南高、武蔵大を卒業した二年先輩の芝悦次郎さんがおられます。

今、高校進学ほぼ全入時代を迎え、新しい高校がたくさん誕生しましたが、やはり古い伝統に培われた学校はどこか違うと思いますが如何でしょう。

まず数多い卒業生が母校に強い愛着をもっております。それは即ちいつでも後輩達を暖かく見守り、素晴らしい人間的環境をつくりあげていることだと思います。先生方も、この伝統に基き、学校に大きな誇りを持ち、そして教育熱心な方ばかりでした。

これから高校生活を迎えようとしている中学生、そして在校生の皆さんに私は一言、『挑戦的であれ』と申し上げたい。世界の中で最も安定し、平和な、総てに恵まれた時代に生れ育った皆さんは、これに甘んじることなく、何事にもチャレンジすることを忘れず、新しい自分自身の道を切り拓いて頂きたいと思います。意欲的な、そして積極的な高校生活をおくる様強く希望します。

（黒須建設㈱勤務　現在あかね会副会長）

合　唱　祭（八王子市民会館）

おもな学校行事（昭和56年度）

一学期

4月	始業式　入学式　対面式　入学時指導 体位測定　健康診断　避難訓練
5月	開校記念日　生徒総会　新入生歓迎会 一年移動教室（一泊）　二・三年遠足 三年模擬テスト　二年実力テスト 中間考査
6月	三年進路説明会　三年模擬テスト 進路に関する卒業生と在校生の懇談会 合唱祭　視聴覚教室　就職希望者指導
7月	期末考査　球技大会　合宿参加者健診 三年模擬テスト　就職希望者指導 終業式　クラブ合宿

二学期

9月	始業式　水泳大会 就職希望者模擬面接　三年模擬テスト 二年進路説明会　一年進路説明会
10月	文化祭　体育祭　中間考査 推薦入学説明会　二年修学旅行
11月	三年模擬テスト　生徒総会
12月	避難訓練　期末考査　終業式

三学期

1月	始業式 三年期末考査　一・二年実力テスト
2月	入学選抜学力検査　マラソン大会
3月	一・二年期末考査　卒業式　修了式 スキー教室

「感動とやすらぎ」を目指す

NHK番組制作局演芸部ディレクター

半沢邦彦

（昭和37年卒）

「本番、三十秒前」NHKホール一杯に響くフロアーディレクターの声。ステージの出演者、そしてスタッフの顔が緊張する一瞬である。「照明さん、スポットライト直して。カメラさん、パターンから入るよ。音声さん、ハンドマイクよろしく」各技術スタッフに、オープニングのQを出す。手元のストップウォッチが刻む、「カチカチ……」という音が、いやがうえにも、修羅場を盛り上げる。

「五秒前、四、三、二、一、ネットイン」痛みだす胃、ひきつれる顔。その反面、仕事がうまくいくように、楽しい番組になるように、心に念じつつスタートのQを出す。毎度のことである。私の仕事は、NHK演芸番組班のディレクターである。歌、クイズ、ゲーム、コメディ、落語など、若い皆さんが、一番興味を持っている（？）娯楽の分野を担当している。

仕事内容を簡単に説明すると、まず企画の提案、（これは、思いつきもあれば、一年もかけて練り上げたものもある。その他、視聴者からいただくアイデア等々）これが通ると始めて、出演者のブッキング、内容の検討、そして予算の設定となる。これらが一つ一つ具体的に手直しされ、美術プラン、照明プラン、カメラ割が入れられて、台本となる。この台本をもとに、リハーサル、そして本番。

ここで大事なことは、内容と人間関係である。たとえば、工夫を凝らし、感動とやすらぎを与える番組にしたい出演者は、田原俊彦と松田聖子で、二人の未知の魅力を引きだす、ツードアショー、後見役に北島三郎と、八代亜紀とする。このプランを基に、スタッフ会議が毎日のように開かれる。二人の魅力は何だろうか。ヤングに受ける要素は？、笑いとペーソスを入れた方が良いだろうか。共通点は。今迄にない工夫は。御対面なども必要か、歌の並びは。そして感動とやすらぎを与えることが出来るだろうか。この会議の決定にしたがって、スタッフが全国に取材にとぶ。

又本番の日は、出演者、スタッフの健康状態や、いかに彼らを乗せるか。終ったあとの「お疲れさま」のひとこと。要するにテレビの仕事は、総合協力の産物であるということである。お互いに理解し合い、信頼し合う、何事にもあてはまることであるが。

娯楽番組を作るうえで、いつも私が思っていることは、どうしたら茶の間の皆さんに、〝感動とやすらぎ〟を与えることができるかということである。どんな世代にも共通する、青春のときめきと切なさ、そんなものをだしたら良いのか。年配の方には、青春の思い出が良いのか。ヤングにはエネルギッシュなメッセージを贈ったら良いのだろうか。いくら考えても答えのでるものでもないが、この十年来の命題――〝感動とやすらぎ〟を目指して、これからも頑張って行くつもりである。そして最後に、君達若者は、青春を大事にしてほしいと思う。

青春とは、感動するハートを持つことではないだろうか！？。喜びと思いやりを感じる柔かい心を持っているのも若者だ。

君のハートに「感動」が生れた時、その時こそ、君の青春は全開なのだ。

日本新記録を生んだプール 正面は全国大会優勝記念碑

活発なクラブ活動
―現在活躍しているクラブ―

文化系クラブ

文芸　フォークソング
社会問題研究　美術
物理　写真
化学　家庭
生物　華道
天文　演劇
英語　聖書研究
音楽鑑賞　ユネスコ
合唱　ボランティア
箏曲　漫画研究
映画研究　ブラスバンド

体育系クラブ

陸上競技　軟式テニス
体操　卓球
水泳　サッカー
剣道　ソフトボール
柔道　バドミントン
ダンス　野球
躰道　ハンドボール
バレーボール　バスケットボール
ワンダーフォーゲル

本誌掲載の写真は、昭和9年本校卒業の高崎久枝さん（八王子市南新町二四　高崎ニュース堂）の提供によるものです。

母校の近況

進む施設・設備の改善

新校舎・多目的教室の完成

母校南多摩高校は、私たち卒業生が見違えるほど、その容姿を一新しつつあります。昭和55年1月に、新校舎(東館)が完工し、懐しい木造校舎は姿を消しました。この新校舎には、普通教室16教室のほか、視聴覚室、社会科教室、音楽室、被服室、食物室の特別教室、さらに保健室、和室、生徒相談室、進路相談室、放送室、印刷室、生徒会室と、全、定両職員室及び会議室があります。この新校舎にひき続いて本年9月に、多目的教室が完成しました。

現在の制服

これは、特別教室の一つですが、合併授業、学年単位の集会、格技、ダンス、卓球などの体育活動など多目的に使用できるようになっています。学校では、この教室の落成を記念して、PTA主催で「公開文化講座」を、この秋二度にわたって(9月12日・10月24日)開いています。南多摩高校の先生方を講師として、一般市民に公開する講座は、高校では画期的なものとして注目され、各新聞にも紹介されましたので、お読みになった方も多いかと存じます。

新しい時代にふさわしい南多摩高校の建設に積極的に努力されている先生方、PTAの方々の意欲に感銘を受けるとともに、創立以来の伝統である地域社会との連携と進取の精神が、脈々と受け継がれていると思いました。

昭和20年の空襲で焼けたが見事に再生した創立以来の樟の大樹

体育館・プール等の改築

本年度は、さらに、体育館・プール等の改築が行われます。一～二階に格技(剣道・柔道)室、トレーニング室更衣室、シャワー室等を備え、三～四階が体育館兼講堂である設計が進められており隣接してプールがつくられます。

これとほぼ時期を同じくして、定時制の食堂も建設されます。これらの工事が終った段階で、校庭と球技コートの本格的な整備と、周囲の塀の改修が行われることになっており、創立75周年にあたる昭和58年の春までには、体育施設は全面的に完備されます。

充実した学校生活

定着した制服

一時廃止された制服は、昭和52年度より新しい意匠を凝らして復活されました。(上の写真参照)

落着いた色彩の、しかも新しい感覚でのデザインは好評を得ています。

南多摩高校の生徒指導が緻密であることは、以前から定評のあるところですが、最近、先生方の熱心なご指導の効果がはっきり現われてきているようで、先生方も張り切っておられます。

先徒は、落着いた雰囲気の中で、学習面でも、クラブ活動などでも、充実した生活を送っており、今後の成果が期待されます。

昭和57年度から、高等学校の教育課程が改訂になるので、学校では、その準備を進められていますが、教科の学習の面でも、学校行事や生徒会、クラブ活動の面でも、充実した学校生活を目指す新しい教育課程が、すでに決定されているようです。

編集後記

◇現在は、母校の将来のためにもまた、時代の要請に応える新しい高校像の創出のためにも重要な時期であると考え、本号の発刊を企画しましたところ、ご多用中にもかかわらず、多くの会員の方々から貴重な原稿をいただき、感謝いたしております。厚く御礼申しあげます。

◇本号の編集・発行につきましては、校長先生はじめ母校の先生方の多大のご協力をいただきました。心から感謝申しあげます。

◇本号が、いささかでもお役に立ち得れば幸甚です。　編集委員会